

令和四年度

麗澤瑞浪に学んで



麗澤瑞浪中学・高等学校  
Reitaku Mizunami Junior and Senior High School

発刊にあたって

校長 藤田 知則

## 第一部 伝統の日 感謝の集い

大切にしたいこと

3年 鈴村 のえみ

この「麗澤瑞浪に学んで」は、毎年六月に行っている「伝統の日・感謝の集い」での発表原稿、生徒寮で開かれる体験発表会での発表原稿、高校三年生卒業時の「麗澤瑞浪に学んで」など、本校の活動の中で綴られたものを纏めた一年でありましたが、感染防止対策を徹底して、ほぼ予定通りに学校行事を行うことができました。行事を通じて学びを得て、成長する生徒の姿を見て、大変嬉しく思いました。学校教育における行事の重要性を改めて感じさせていただきました。

本校は、昭和三十五年に、全寮制の学校としてスタートしました。多様な人間関係の中で学び、時に葛藤することは人間の成長に必要不可欠です。困難とも言えるこの時期に、国家、社会の発展と人々の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成する本校の教育の一端を感じとっていただけたら幸いです。

世界には、戦争が続いたり、貧困の中で暮らしていたり、苦しい状況の人が多くいます。最近、ウクライナでは、ロシアからの攻撃に巻き込まれ、多くの一般の人が命を落としています。また、貧しさで私と同じくらいの子供が学校に行けず働いてきょうだいを食べさせています。ご飯を食べ、学校に行き、勉強をし、帰る家があることが私の当たり前ですが、世界にはこれができず苦しんでいる人が多くいます。だからご飯を食べられることに感謝し、学校に行けることに感謝し、勉強できることに感謝し、家があることに感謝すべきであることに気が付きました。

今、世界中で新型コロナウイルスが流行しています。このコロナウイルスに毎日多くの人々が感染し亡くなっています。このコロナウイルスにより私たちの生活は大きく変わりました。マスクの着用やソーシャルディスタン

ス、不要不急の外出の自粛などの感染予防が当たり前になりました。

私はこのコロナウイルスの影響で様々な幸せに気が付きました。そのうちの一つは学校に行ける幸せです。私は新型コロナウイルスの感染拡大予防により学校が休校になり、最初のうちは正直少しうれしかったです。しかし、だんだんやることもなく、家族以外の人



に会えず寂しくなっていました。いつ、流  
行が終わるのか分からないので、この先どう  
なるのか今も不安です。

私はここ二年の自粛生活で、今までの当た  
り前がとても有難いものであったことに気が  
付きました。そして何かをしてもらったり、  
もらったりしなくても、日常の中には多くの  
感謝すべきことがあることに気が付きました。

昔から日本にはあらゆるものに感謝する考  
え方がありました。私たちの祖先である古代  
の日本人は、狩猟や採集など自然から多くの  
恵みを得て、自然に感謝していました。そう  
していく中であらゆるものに感謝するようにな  
りました。日本の固有の宗教である神道で  
は、地上のすべてのことに神が宿ると考えて  
います。「祖先崇拜」と「自然崇拜」が基本で  
す。それゆえ神道では「八百万の神」と言われ  
るまでに多くのものを祀っています。木や岩、  
山、滝、火、自然以外では家、トイレ、台所、  
髪の毛、紙など様々なものに神を感じ、祀っ  
てきました。こんなにも多くの神がいる宗教  
はあまりありません。

このように私たちの祖先である古代の日本

人は、あらゆるものを崇拜し、神を見出し敬  
つてきました。そして、あらゆるものに感謝  
する教えは今に受け継がれてきました。今で  
も日本には食事の前に「いただきます」と、ご  
飯を作ってくれた人や食材を作ってくれた人  
そして食べ物に感謝する文化が残ってい  
ます。日本古来のあらゆるものに感謝する文  
化は私たちの日常の中に溶け込んでいます。

また、私は親や先生、友達など多くの人に  
支えられて生きてこられたということにも気  
付くことができました。私たちは気付かない  
うちに多くの人と関わり合い、支え合うこと  
で生きています。支えてもらうだけでなく支  
える側にもなりたいと思います。

廣池千九郎先生は、私たちは宇宙自然のは  
たらきによつて生かされており、私たちが宇  
宙自然の一部であると教えてくださいました。  
だから、環境破壊や地球温暖化の進む今の人  
間中心の考え方は正しくないのです。私は宇  
宙自然の中で生かされていることに感謝し、  
人間中心の考え方を改めることで、宇宙自然  
のはたらきに従うことができると理解するこ  
とができました。

私は当たり前だと思っていた日常の中には  
多くの感謝すべきことがあり、私は今まで多  
くの人たちに支えられ生きてこられたという  
ことに気付くことができました。私はこれら  
のことに感謝し、よりよい未来をつくること  
が恩返しになると考えます。だから、私たち  
は今あるもの、支えてくれた人に感謝し、未  
来を支えていかなければなりません。私はこ  
れから、何事にも感謝し、様々なことに一生  
懸命に取り組み、これらのことを多くの人に  
伝えることで恩返ししていきたいと思えます。  
ご清聴、ありがとうございました。

「教え」を繋ぐ

6年 笹原 琳央

私の両親は、この麗澤瑞浪で出会い、結婚  
しました。小さい頃から両親の高校時代の話  
を聞いたり、何度も訪問したりしていたので、  
当たり前のように自分は麗澤瑞浪に通うもの  
だと思っていました。ですが、本気で入りた  
かったのかと問われると分かりません。一応

受験勉強はしていましたが、落ちてもいいや、くらいの軽い気持ちで受けたように思います。しかし、運良く合格でき、入学することになりました。

入寮して四日目、私はある友人と些細なことで喧嘩をしました。そのときはいつの間にか普通に接することができるようになっていました。それがほぼ一年間、私の寮では友人関係のトラブルが絶えませんでした。先生や先輩方にもたくさん迷惑をお掛けしました。毎日のように泣いていた時期には、母と沢山電話で話しました。母は友人関係がうまくいかない私に「三方良し」について教えてくださいました。母は私の祖父から教えてもらったそうです。相手も良し、自分も良し、周りも良し。道徳の授業でも「三方良し」については学びますが、私はこれを母から聞いて良かったと思います。実行するとその場での自分の感情や思いを優先してしまうこともあり難しかったですが、二年生になる頃には衝突することも減り、寮生活も学校生活も段々とうまく進むようになっていきました。

私の父は在学中、生徒会長を務めていたそ

うです。そのせいか、私は生徒会活動に興味があり、昨年、文化委員長に立候補し、役割をいただくことができました。中学生のときにも副委員長を務めましたが、そのときには気づかなかったことがあります。それは「何かを成す」ためには、その前にたくさん積み重ねがあるということです。私たちが学んでいることを先人が発見してくれたように、行事ごとにも練りに練った積み重ねがあります。これは生徒会行事や企画書の制作などを通して改めて気づかせてもらいました。文化委員長にならなければできなかった経験です。この役職を務めさせていただけに感謝し、これからも精進していきます。

私はもう一つ、大きな経験をさせていただいています。それは寮長という役割をいただいたことです。実際にお話を受けるまで寮長になるということを考えていたことがなかったの、咄嗟に返事をしてしまったものの、衝撃的で頭が働いていなかったように思います。立派な先輩方の姿を間近で見てきたので、自分に寮長が務まるのだろうかと不安に思うこともありました。しかし、前寮長の先輩が励

ましてくださったおかげで務めさせていただく決心できました。同じ寮の副寮長は、入寮四日目で喧嘩をしたあの友人です。彼女とは様々な問題を共に経験してきました。お互い嫌な思いも、喧嘩もたくさんしたからこそ今では許し合える仲になりました。私は寮長らしくない寮長ですが、彼女が隣にいてくれるおかげで寮の運営がうまくいっているのだと思います。

私は我ながら協調性に欠けたところがある



と思います。自分が正しいと思ったことは何であれ突き通そうとしてしまいます。機嫌によつて言動が変わつてしまふこともありまふ。そんな私でも今、たくさんの友人の中で笑ひ合っているのは、周りの友人が私を受け入れてくれているという点が大きいように感じまふ。最近まではこのようなことは考えませんでした。麗澤での残りの生活が短くなつていく中、しみじみと思うようになりました。

私が、麗澤瑞浪で学んだことはたくさん「教え」です。先生方、先輩方、友人、祖父、父、母。日常の教えは様々なところから吸収できるのであります。私は何か壁にぶつかると、大きな困難に直面した先人が、困難を乗り越えるために見つけた、生きるためのヒントだったのではないかと思ひました。「三方良し」もその一つでしょう。その「教え」は人から人へと繋げられ、私のもとに來たものです。そう考えると、「教え」とは、「教える」ことではなく「教えられる」ことなのであり、私にも「教え」を繋ぐ役割があるのだと気づき

ました。私もいつか誰かにその「教え」を繋ぎたいと思ひます。

きつとこれからも私は、高い壁にぶつかることが多々あるでしょう。しかし、私はここ麗澤瑞浪で様々な経験をし、様々な「教え」に触れ、その度に自分を成長させることができまふ。私は自信を持つて言えます。これからも必ずその壁を乗り越えようと努力し、きつとその先の景色を見ることができると思ひます。そんな自信を持たせてくれた麗澤瑞浪には改めて感謝の気持ちを述べたいと思ひます。

「清聴、ありがとうございます。」

## 第二部 生徒体験発表会

### 【男子寮】

寮生活で得た新しい自分

6年 牧島 治樹

私が麗澤瑞浪高等学校で寮生活を始めてから二年以上が経ちました。同世代の仲間と同

じ屋根の下で暮らし、そこからたくさんものを得ました。

一つ目は、自分の視野を広げられたことです。元々住む場所も環境も違つた人達ですから、当然持つている価値観も違ひます。かつての私は、自分とは違ふ価値観の人を敬遠しがちでした。絶対自分に間違ひはない、という考えで、同じような考えの人しか大切にできませんでした。しかし、寮生活では、どんなに自分と違ふ考えの人でも同居人として関わらない訳にはいきません。我が強い私が苦労したことの一つです。しかし、触れ合つていくうちに異質の価値観も認めることができるとなりました。たくさん考えを受け入れ納得できるようになると、今まで自分ひとりの考えでは見えなかつたところも見えるようになり、ぐんと視野が広がつたように思ひます。まさに寮生活をしなければ得ることのできなかつたものであり、新しい自分にとつて出会えたことの一つです。

周りに対する感謝の心を持つこともこの寮生活で得たものです。今まで私は、感謝は大切だと知りながらも心から誰かに感謝したこ



とがありませんでした。私を思うがあまりいろいろと助言してくれる周りの大人の方々の言動も当時の私からしたらお節介そのものであり、不快以外の何物でもありませんでした。しかし、寮生活を始め、見ず知らずの地で生活するようになると、親をはじめ遠く離れた大人の方々のありがたさに気づき始めました。自分がわがままを言っただけでいられたのも、安心して生活できたのも、その人達のおかげだったと気づいたのです。知らない地で不安と同時に感じたこの感謝の気持ちは今も私の心の中にあります。

私が寮生活を通して得た一番の大切なものは家族からの自立です。寮生活ですから、食事以外の身の周りのことは全て自分でこなさなければなりません。洗濯や掃除、体調管理など、生活するうえで必要なことを全て一人でできるようにしたのも寮生活で得たことです。経済的な意味を除けば、いつ一人にされても自分でこなしていけるようになったかと思えます。生活力を高められたことは今後一番活かしていけると思っています。

寮生活も残りわずかとなった今、両親や先

生方そして周りの仲間への私からの感謝の気持ちは言葉で言い表せない程です。本当に今までありがとうございました。実りある寮生活を送れたのは、全て周りの方々のおかげだと実感しています。入寮から光のような速さで時が流れ、間もなく退寮の日を迎えます。ここで得たものは全て私の財産です。決して無駄にすることの無い生き方を、この先もずっとしていけます。たくさん大切なものを得ることができたと実感しています。



欠かせない存在

3年 関 大夢

三年生となり、七ヶ月が経過しました。僕はB<sup>12</sup>寮の副寮長をさせてもらい、いろいろな経験をしました。楽しかった経験やおもしろかったことなど良い思い出をたくさんB<sup>12</sup>にさせてもらいました。しかし、楽しい思い出だけではなかつたです。悩んだこと、迷ったこと、苦労したことも、楽しかった経験と同じぐらいありました。

その中で、最高学年となり気づいたことがあります。寮生活をしていく中で欠かせない存在は誰かということです。僕は二つの存在が不可欠だと思います。一つ目は両親です。二年生で入寮して両親のありがたみを知りました。最高学年になり、苦悩することが多くなりました。学年が上がるにつれて、両親に相談することも多くなっていきました。相談すると優しく接してくれて、アドバイスしてくれ、励ましてくれました。自分自身でも気持ちが高まりました。身の回りのことだけではなく、心のサポートまでしてくれて、寮



生活に欠かせない存在だと思いました。  
二つ目は同級生です。一、二年生までは一番一緒にいる仲間、としか思っていないませんでした。しかし僕たちの代が最高学年となり、後輩との接し方や寮の問題を考えて改善するということを、具体的に考えていかななくてはならない立場になりました。そんなときに同じ境遇である同級生という存在が大きかったと思います。僕が悩んでいたりと困っていたりしても、周りには相談できる仲間がいると思

えて、前向きに物事を捉えられています。今では、同級生が一番一緒にいる仲間というだけではなく、同じ壁を一緒に試行錯誤して一緒に壁を乗り越える、寮生活には欠かせない存在だと思えます。

寮生活は一人では絶対にできません。支えてくれている人がいての寮生活です。そのことを考えて感謝し、大切にして、残りの中学校生活を送っていききたいです。

## 【女子寮】

### 寮の伝統

#### 2年 湯浅 梨乃

私は寮生活を送らせてもらったからこそ、多くのことに気づくことができました。それは、この学校が掲げている「自立・感謝・思いやり」を中心にした友達・先輩後輩との関わり方、親への感謝の気持ち、周りへの優しさ、挨拶の大切さです。中でも、私は周りへの優しさを特に大切にしています。

一つは厳しさのある優しさです。寮にはたくさんのルールがあり、特に時間に関しては一人が遅れてしまっただけで、寮全体が止まってしまうこともあります。また、挨拶や言葉づかいを含めた礼儀がいまいになっていると相手に悪い印象を与えてしまいます。そのため先輩方は注意してくださります。正直、私は一年生のとき注意されるのが苦手でした。しかし、二年生になってから、後輩をもち、注意するためにはたくさん準備をされていたのだと気づきました。注意するということの厳しさの裏には、時間をかけて準備する優しさがあるのだと分かりました。

また、受け入れる優しさにも気づきました。この寮にはさまざまな環境で育った人が集まっています。特に同学年の子とは価値観の差などからぶつかり合うことも少なくありません。しかし、ぶつかり合った後に受け入れていくことでより仲が深まるのだと気づきました。さらに、新しい考え方を受け入れることで、自分の世界も広がっていきます。確かに、受け入れずに、自分の考えを押し通すこともできるかもしれませんが、しかし、お互いに受

け入れる優しさを持つているからこそ、こんなにも居心地の良い寮が成り立っているのだと思います。

次に勇気のある優しさです。先ほど、受け入れる優しさについて話しましたが、受け入れてもらえるために、自分を見せる勇気が必要だと思いました。相手を受け入れてばかりだと、いつか疲れてしまいます。自分の言いたいことを伝える勇気、そしてそれを受けとめる勇気があるからこそ、友達を越えた関係を築くことができるのだと思います。

そして、見返りを求めない優しさです。誰かが傷つくと思うことはしない、悪口・陰口を言わない、見返りを求めない、自分の利益やメリットを考えずに行動する優しさ、気づいたらやっておくという優しさがあるからこそ寮は成り立っているのだと思います。検査表を配っておく、除湿器の水を捨てる、掲示物を張り替える、そのような誰も見ていないところで、誰かのことを思ってサツと動ける優しさが寮にはあふれていると思いました。

最後に、そっと見守る優しさです。大変そうだと思うたら、そっと手を差し伸べられる

ような空気感は寮だからこそだと思います。いつも見ているからこそ、相手の行動が普段と違うとそれにもあります。そんなとき、小さく「私はあなたの味方です」とサインを送るようにしています。いつもより長く話してみたり、お菓子を渡したり、あきらかに心配している風にするのではなく、あくまでも



自然に接するようにしています。その方が相手も気楽だと思うからです。私は、今までたくさんさんの優しさをもらってきました。優しさがるからこそ、寮生活を乗り越えてられました。それを伝えるために、優しさを受け取る側だけでなく、受け渡す側としても頑張りたいと思います。

## 二年半の寮生活

6年 鈴木 優光

あと四十八日。コロナ禍で六月から始まった高校生活も、あつという間に残りわずかとなり、その生活の大半を寮で過ごしてきました。私は、四年生、五年生、六年生、それぞれで感じたことがあります。

まず、四年生のときは仲間の大切さに気づかされました。一緒に入寮した五人の同級生のうち、四人は顔見知りです、すぐに打ち解けることができました。しかし、それが裏目に出てるさくしてしまい、上級生の方に注意されてしまいました。また、仲良くなり過ぎ



て逆に人間関係が悪化したこともありましたが、最終的にはとても楽しく終ることができました。この経験から、人の気持ちを十分に考えて行動すべきだということを学びました。そして、友達と何気ない会話をしたり、協力して寮の仕事をしたりしていくうちに、仲間がいることのありがたさに気づきました。

次に、五年生では感謝について学びました。寮も変わり、新四年生も入寮し先輩となり、寮の仕事をする立場から教える立場になりました。そのため、少しはゆとりを持って生活できると思いましたが、全くそうではありませんでした。何も知らない四年生に、一から教えないければならないので、全てを教えるのにはとても時間がかかりました。また、自分では理解していてもそれを言葉にするのは難しく、私たちが四年生のときに教えて下さった上級生の方の凄さとありがたさを実感しました。

そして、六年生でリーダーシップとはどのようなものを学びました。私は、五年生の三学期から寮長を務めさせていただいています。寮長になったとき、寮のみんなをまとめ

ていく方法が分かりませんでした。正直、今でも正解は分かりません。私は、自分から意見を言うのが苦手で、他の人には注意をしたり言うべきことを言わずじまいで終わってしまいうことが多かったです。そのため、まとまりがなく、縦と横のつながりがうまくいかない日々が続き、みんなに迷惑をかけてしまうこともありました。しかし、そんなときある先生が、「自分のふるまいで周りの雰囲気が変わるよ。自分が暗ければ寮もピリピリした感じになるし、明るければ明るくなるよ。」と教えて下さり、自分があまり明るい雰囲気ではないことに気がつきました。それから、しっかりと挨拶をして、寮の仕事を四、五年生に任せるのではなく、自ら進んで行うのを心がけました。そうすることで、少しだけ心持ちは楽になりました。また、人に何かを相談するのも得意ではなかったため、自分の寮のことは自分で何とかしなければと思っていました。しかし、抱え込んでいるだけでは一向に解決できなかつたため、勇気を出して、他の寮役員に話を聞いてもらいました、すると、今まで見えなかつたものが出てきたり、寮を

まとめることに関してもいろいろな方法があることが分かりました。寮長ができるのもあと少しですが、みんなが過こしやすい環境を作るために、尽力していきたいです。

二年半の寮生活は、数えきれないほどの学びを与えてくれました。地元の友達を見ると、何故私は寮生活を選んだのだろうと思うこともありました。しかし、私はこの生活で、普通の高校生活ではできない経験ができて良かったと思っています。ここでの学びは、これからの大学進学、就職など、どの場面においても活かしていきたいです。

最後に、今ここにいるみなさんへ。まず、四年生のみなさん。今は寮ではするべきことや大変なことが多く、寮を辞めたいと思った日も何度もあります。しかし、その経験は必ずどこかで役に立ちます。私は、先輩になつてから気づけました。次に、五年生のみなさん。後輩に教えることに、とても苦労するし、うまく教えられず自分を責めてしまうこともあるかもしれません。しかし、今こうして四年生がしっかりと寮の仕事をしてくれ

ているのは、五年生のおかげです。勉強も部活も五年生が一番大変な時期なのに、本当にありがとう。その次に、六年生。寮長としての役目を果たせたことなんてほとんどないけれど、受け入れてくれて、たくさん支えてくれて感謝しかないです。一緒に過ごせる日も多くはないけれど、みんなで楽しめたらいいなと思っています。そして、お父さん、お母さ



ん。私をこの学校・寮に入らせてくれてありがとうございます。とくに、高校二年生のとき、怪我で手術をして、寮での生活でたくさん心配をかけてしまいました。その度、電話をかけてくれ、荷物を送ってくれてありがとう。これからは、恩返しをしていけるよう頑張ります。それから、細川先生、飯田先生、チューターとして一番に寮を支えて下さり、ありがとうございます。

### 【部活寮】

#### 寮生活を通して

6年 野球部寮 周 英吉

三年間の野球部寮での生活の中で、私は多くのことを学び、感じ、経験しました。うまくいかないことや挫折を乗り越えていく中で、主に三つのことに気づかされました。

まず一つ目は、「環境が人を創る」ということです。寮生活においてどれだけ自分たちの力で環境を整えて、生活することができてい



たかということが、大きくチームの戦いの結果に関係していたのではないかと感じました。昨年の岐阜聖徳学園との練習試合を終えた後のバスミーティングで、改めて寮での環境を見直すことを話し合い、実行に移せた結果が、春の県大会出場につながったのではないかと私は考えます。掃除時間での取り組みや、日々の目配り、気配り、心配りが、自分が結果を残すための環境づくりにつながっていくと思うので、これからも続けていきたいと思えます。続いて二つ目は、全てのこと感謝する心

が芽生えたことです。私が寮生活を続けることができたのは、家族、仲間、先生方の支えがあったからでした。三年間故郷に帰ることができず、苦しい時期が続く中でも、両親が電話で相談に乗ってくれたり、必要な物を送ってくれたりしました。困った時には、仲間のサポートや先生方のご指導のおかげで、今日までやってこることができました。そのことに改めて感謝申し上げます。たくさんの方の助けがあるからこそ、自分を支えてくれる多くの人の期待や願いを裏切ることの無いように、必ず恩に報いるという気持ちを胸に刻んで生活できました。これからも期待にこたえて、報恩できるように過ごしていきたいと思います。

三つ目は、「報告・連絡・相談」の重要性です。寮役員として普段の生活の中での仕事や、林先生から頂く仕事の中で、逐一仲間や先生方との相談や連絡をして、スムーズに周知することの重要性を学びました。情報を常に共有して物事に臨むことで、より速く丁寧に取り組めます。これらのことは、寮生活の中のみならず、社会に出てからも人から信頼され

るために欠かせないことだと思うので、残り少ない寮生活でもおろそかにすることなく取り組んでいきたいと思います。

私は寮生活を通して大切なことを学びました。寮長として、至らない点が多くある中でも、少しずついろいろなことを吸収して、成長していきます。残りわずかな寮生活で、全ての人に恩返しができるように、日々精進していきたいと思えます。



## 成長のために

テニス部寮 菅沼 慶太

私が二年前の六月に入寮してから一年半という時間が経過しました。入寮当初は慣れないながらも先輩方や同期の三人に支えてもらいながら生活していました。当時の私はミスも多く、先生や先輩方からご指導を多く頂きました。同期の三人とちよつとしたことばつかることも多々ありました。しかし、後輩ができたことで、教えることが増え、少しずつ自分も変わり成長していきました。そして、今年、先輩方が抜け、私たち四人で寮を引っ張っていくようになりました。

その中で、私は二つのことを学びました。一つ目は、感謝することの大切さです。両親や杉江先生、先輩方に教えて頂いたことや支えていただいていることに感謝すること。クラスメイトや先生方、さらには物や場所にも感謝すること。これらができるといふことは、同時に謙虚でなければならぬということです。謙虚であれば感謝し続けられ、成長へと繋がっていると分かりました。私は失敗

し、迷惑をかけてしまった際に、申し訳ない気持ちや「どうして、こんなこともできないんだろう」という気持ちばかりでした。しかし、そんな時に落ち着いて考えて行動することを意識するようになり、これまでの失敗から自分自身を成長させることができました。今では、あの時ご指導してくださった先生や先輩方に感謝しています。そして、あの時のダメな自分にも「そこから学ばせてくれてありがとう」と思えるようになりました。感謝に終わりはありません。だからこそ、成長していけると学びました。

二つ目は、6年生になって何かを伝えるために、その人に合った言い方、やり方をしていくことが大切だということを学びました。お世話になった先輩方は、私たちに優しく、明るく、そして時に厳しくご指導してくださいました。私たちが成長していけるように導いて下さった先輩方の姿を見て、私にもこんな先輩になりたいと、目標を立てることができました。

その一方で、先輩方が先生からご指導をいただいた内容を聞いて、自分自身を振り返る

ことができ、そこからも学びがたくさんありました。それらを踏まえ、最高学年としてどんな振る舞いを見せていくかを考えられました。

6年生として、寮長として、先輩方から学んだことと自身で経験したことを伝えられるように意識しました。しかし、まだまだうまく伝えられないことがあります。今でも先輩方と自分を比べて考えることがあります。最近では、自分自身の至らない点に気づけることも多くなってきました。

寮長になってすぐの頃は、うまく伝えられないことがあると、どうしたら良いのか分からず頭を抱えていました。葛藤することも何度もありました。それでも寮長としての自覚を持ち、責任を持って取り組む中で、自分自身の成長の機会になっていると気づけました。入学時の自分と、今の自分を比べてみると大きく成長できたと感じます。それができたのは、杉江先生や先輩方、同期の三人、そして、後輩たちのおかげだと思います。まだまだ改善すべきところがあり成長の余地はありますが、たくさん学び、たくさん成長してい

けるように精進していきます。





## 第三部 修学旅行

### 修学旅行を振り返って

5年 大谷 望瑠

新型コロナウイルス感染症の対策をしながら、私たちは予定通りの修学旅行に行くことができました。三泊四日の修学旅行はとても楽しかったと同時にとても疲れました。しかし、この疲れすらも私にとっては良い思い出となりました。なぜこのような思い出に残る良い修学旅行になったのでしょうか。私なりに考えたことは二つあります。

一つ目は皆が規則を守ったことです。新型コロナウイルス感染症の影響で制限されてしまうことは多々ありましたが、私たち一人一人の為だと思いがたく感じましたし、規則を守ることの大切さに改めて気づくことができました。

二つ目はこの修学旅行に協力してくださった方々のおかげだということです。感染症対策をしたうえで楽しい修学旅行は旅行会社、バス会社、宿泊施設、飲食店、資料館、立命館

アジア太平洋大学の方々の協力がなければ実現しなかったものです。美味しい食事、丁寧な対応、快適なホテルの部屋と温泉など、どれも良い思い出に残るものでした。

この修学旅行を「楽しかった」、「思い出に残った」だけで終わってしまうのはもったいないと思います。楽しかった思い出の裏には沢山の方の努力があると思います。その方々に感謝することがこの修学旅行で一番大切なことだと学びました。

高校生活は新型コロナウイルス感染症とともに始まりましたが、コロナ禍でも楽しい思い出をつくる事が出来てとても嬉しかったです。コロナ禍をマイナスに考えるのではなく、コロナ禍で何ができるかというプラスの考えを持つことが大切だと学びました。

私たちの健康と安全を考えて九州に連れて行ってくださった先生方にも感謝を伝えたいです。本当にありがとうございました。



### 九州研修旅行を振り返って

5年 四宮 慶子

今回の九州研修旅行では、知覧、高千穂、立命館アジア太平洋大学、別府の温泉など、九州各地の名所を観光することができ、各々の場所ですさまざまな気づきや学びを得ることができました。

一日目に訪れた知覧では、太平洋戦争の最中、特攻隊の方々が多くの犠牲を払った上に、今日の日本の平和が保たれていることが分かりました。戦争の記憶が薄れつつある現在でも、受け継いでいかなければならない記憶だと感じました。

二日目に訪れた高千穂・天岩戸神社では、改めて日本古代の神話や国の成り立ちについて思いを馳せることができました。教科書の写真で見たことはありましたが、現地を訪れることで、より日本の古代や神話についての理解が深まったと感じました。また、日本という国が一度でも滅びていたら日本の神話は現在まで残っていなかったのだろうと考えると、改めて国が存続することの素晴らしさが理解できました。

三日目に訪れた立命館アジア太平洋大学では、国際学生の方と英語でやり取りをするところができるという貴重な体験をさせていただきました。大学の中を、さまざまに国籍の人々が行き交っているのを見ると、本当に斬新でおもしろい校風だと思います。また、外交の方と関わるには英語を使いこな



さなければならぬことが実感できました。

四日目に訪れた福沢諭吉記念館では、日本の明治という激動の時代に生きた人々の偉大さを改めて感じることができました。また、『学問のすゝめ』を書いた人ということ以外知らなかった福沢諭吉のことを、記念館では更に詳しく知ることができ、新しい発見を得ることができました。

九州修学旅行で得たことを、そのままにするのではなく、自分の中に落とし込んで、今後の人生に活かしていきたいと思えます。

## 第四部 六年生 麗澤瑞浪に学んで

### 麗澤教育に学んで

6年 足立 薫乃

私が麗澤瑞浪の学校生活で学んだことは、大きく分けて二つあります。

一つ目は、挨拶の大切さです。挨拶が盛んな麗澤瑞浪の校風において、入学当初は、「挨拶を絶対に忘れてはいけない」という圧力に緊張していましたが、毎日毎日続けることよって挨拶は私の習慣になりました。通りすがりに短い言葉を掛け合うだけで、自分と相手の間にある壁が少し無くなる感覚を肌で感じるようになってきます。友達に話しかけやすくなったたり、先輩や先生方に顔を覚えていただけたり、近所の方と親しくなれたり、挨拶を習慣にすることで得られる恩恵はたくさんあります。私は、その恩恵によって何度も救われてきました。

相手や状況に合わせた言葉遣いや声のトーンを駆使して、自分を印象付ける挨拶をこれ

からも大切にしていきたいです。

二つ目は、メモを取ることの大切さです。麗澤瑞浪では、「今未来手帳」という生徒手帳が配布されます。私は高校1年生の頃からこの手帳を毎日持ち歩き、ショートホームルームや授業の際、先生が提出物や小テストの連絡をする際には、すかさずカレンダーに書き込むようにしました。メモを取る習慣が無かった頃と比べて忘れ物が圧倒的に少なくなり、友達からの「明日提出物ある?」「小テストっていつ?」という質問にも自信を持って答えることが出来るようになりました。また、高校で成績が上がったのも、学習予定を手帳にまとめて、テスト週間のスケジュールを可視化したことが大きかったと感じています。

これから先もメモを取る機会が沢山あると思うので、麗澤瑞浪で身に付けたこの習慣を大切にしていきたいです。



ありがとう

6年 奥村 萌

麗澤瑞浪での六年間は学びの連続でした。先生から、先輩や後輩、友人から、ここには書ききれないほど、多くのことを学びました。

とくに心に留まっている学びは、今の環境で過ごせているのはとてもありがたいことだ

ということでした。これは親元を離れて生活をする寮生から学びました。身の回りのことを自分一人でごなす自立した寮生と比べると、洗濯や料理などの家事は両親に頼りきっている私がどれだけ未熟で子供なのか、そしてこの何不自由な生活がどんなにありがたいことなのかを痛感しました。麗澤瑞浪に通ったからこそ得られた学びだなと思います。

また、私を直接支えてくれる人だけではなく、私にとって困難なこと、今をつくづくくださった先人、周りがある豊かな自然など、ありがたいものは挙げればきりがありません。いのだということ、道徳の授業を通して学びました。それを学んでから私の生活は「ありがとう」で溢れかえりました。どんな困難に直面してもありがたいことだと前向きに捉えられるようになりました。また、「ありがとう」と口にする度、私が今どれだけ恵まれた環境にいるのか、どれだけ支えられて生きていくのかをより強く実感し、今の環境に心の底から感謝の念が湧くようになりました。

「ありがとう」たった五文字ですが、人生を豊かに、前向きにする魔法の言葉だと思いま



す。今いる環境のありがたさを教え、私の人生を明るく豊かにしてくれた麗澤瑞浪の先生、仲間、環境、そして私を麗澤瑞浪に通わせてくれた両親には感謝しかありません。

六年間、ありがとうございます。



## 第五部 卒業式答辞

6年 佐々木 里沙

寒さの中にも春の訪れを感じる季節になりました。新型コロナウイルスの感染拡大が依然心配される中、私達卒業生のためにこのような卒業証書授与式を挙げていただき、心より感謝申し上げます。理事長先生をはじめ、校長先生、在校生からの強く、温かい御言葉に胸が熱くなりました。本当にありがとうございます。

入学から三年間、または六年間が経とうとしています。自然豊かな麗澤瑞浪で過ごした日々は、目に映る全てが新鮮で、とても色濃いものとなりました。そして、振り返るとそこには沢山の素晴らしい出会いと経験があり、沢山の方々に支えられてきたことを改めて実感します。

入学当初、人見知りだった私は不安と緊張でいっぱいでした。しかし、全国から集まる個性豊かなクラスメートや、同じ屋根の下で共に生活をする寮の先輩方、同級生達が優しく温かく声を掛けてくれたおかげで、不安は

すぐに消え、これから始まる新たな生活にとってもわくわくしていたことをよく覚えていました。

麗澤瑞浪では、様々な活動を通じて「自立」「感謝」「思いやり」の心を育むことができました。親元を離れ、全国から集まる仲間達と二十四時間を共にする寮生活。私はこの寮生活を通じて、「自立」や「思いやり」を学びました。育った環境も考え方も違う仲間達との共同生活、初めは楽しいことばかりではありませんでした。ぶつかり合って、時には涙を流し、挫折そうになる日も沢山ありました。しかし、いくつもの苦楽を共に経験していく中でお互いを認め合えるようになり、いつしかお互いにとってかけがえのない存在になりました。

入学当初、私はとても感動を覚えたことがあります。それは、「ありがとう」の言葉です。麗澤瑞浪の先輩方はどんなに些細な出来事にも「ありがとう」を言っていました。そして、「ありがとう」と言われた際には「ありがとう」を返します。この校内に溢れる沢山のありがとう。それは、私達が人に優しくなるために





少しの勇氣と、そして幸せをくれる言葉です。このような素敵な伝統を私達は受け継ぎました。そして、この伝統は今も後輩達に受け継がれています。

私は中高六年間、吹奏楽部に所属していました。入部すると先輩方が明るく温かく迎え入れてくださいました。そして、演奏を聞いてくださる方々に笑顔を届けるために、さらにパフォーマンスが良くなるように努力し続ける先輩の姿を目の当たりにして強く憧れを抱き、少しでも近づぐことができるように必

死に練習しました。失敗したり、叱られたり、落ち込んだりする日もあれば、自分や仲間の成長に喜ぶ日もあり、悔しい日もあれば楽しくて家に帰りたくない日もありました。この全ての瞬間を共に過ごし、努力してきた仲間達は一生の宝物になりました。いつも隣で支え合ってきた同級生、憧れの姿を教えてくださいました先輩、私達を信じてついてきてくれた後輩、そして優しく時には厳しく沢山のことを教えてくださいました先生方に心から感謝しています。ありがとうございます。

三年前の春、私達の学校生活は新型コロナウイルスとともに始まりました。楽しみにしていた高校生活は思い描いていたものとは異なる形となり、学校行事が無くなるだけではなく、対面授業でさえ受けられない日々が続きました。

高校生活最後の一年、先生方や保護者の皆様をはじめとする沢山の方々のご協力により、麗澤祭や陸上競技会など生徒が楽しみにしていた行事を行うことができました。

ウイズコロナで、ただ以前の行事に戻るだけではなく、今に合わせた新たな形を考え、

生徒が主体となって企画する大きなきっかけとなりました。この変革を在校生の皆さんには、ぜひチャンスにでもraitたいと思います。五年生が中心となり、新たな麗澤瑞浪を形作ってください。

最後に、いつも私を一番に支えてくれた家族へ。私は麗澤瑞浪に入学して、多くの人と出会い、数え切れないほど沢山の愛をもらいました。心配をかけることもありましたが、いつでも私の味方でいて応援してくれて、とても心強かったです。両親や家族のおかげで本当に素晴らしい経験をすることができました。麗澤瑞浪に入学させてくれてありがとうございます。これからも沢山迷惑をかけると思いますが、今まで支えてもらった分今度は私達が家族の支えとなれるように成長していきます。

これから私達は卒業し、それぞれの夢や目標に向かって進んでいきます。大きな壁にぶつかり、時には孤独を感じ挫けそうになる日もあるかもしれません。しかし、これまで沢山の困難を乗り越えてきた自分たちを誇りに思い、そして私達には沢山の仲間がいることを忘れず、麗澤瑞浪で学び育んだ心を胸にこ

れからの人生を歩んでいきます。

名残りは尽きませんが、理事長先生をはじめ、校長先生、先生方、家族、そして学校生活を支えてくださった全ての方々のご健康とご活躍、そして、愛する母校の益々の発展をお祈りすると共に、心からの感謝の気持ちを込めて答辞とさせていただきます。

